

在宅医療助成 勇美記念財団

「ケアマネジャーを対象とした在宅医療の研修」完了報告書

テーマ

看取りのケアプラン 作成時における医療 との連携

申請者名 土居 弓子

所属機関 板橋区ケアマネジャー研究協議会

職名 会長

所属機関所在地 〒173-0023 東京都板橋区大山町57-
6-103

つくしんぼ介護保険相談室内

板橋区ケアマネジャー研究協議会事務局

TEL 03-5917-6365

FAX 03-6679-2471

提出年月日 平成24年3月21日

はじめに

ケアプラン作成時において、看取りのケアの事例が年々増加してきている。現在のように核家族化が進む前までは日常の生活のなかでも死は身近にあったように思う。

医学の進歩と保険制度の整備により、病に罹ればほとんどの人々が病院内で死を迎える事が極日常になった昨今、新たな制度改正や、情報社会による在宅で看取るという選択が出来るようになり、「看取りのケアプラン」が求められるようになってきた。

医師により、患者も家族も病気の説明や予後の説明は受けていても、やはり、いざ在宅へ戻るとなると不安を抱えていることも多く、またケアマネジャー自身も悩みながらプランを作成していることが少なからずあり、事例研究や事例検討などの研修が望まれていた。

研修までの流れ

- ・平成23年1月24日 第1回実行委員会
研修による目的の確認及び今後の計画の為の話し合いなど
- ・平成23年3月28日 第2回実行委員会
講師選任及び研修までの日程確認など
- ・平成23年5月23日 第3回実行委員会
第1回研修の最終確認など
- ・平成23年7月25日 第4回実行委員会
第1回研修の反省点及び次回研修の確認など
- ・平成23年9月26日 第5回実行委員会
第2回研修の最終確認など
- ・平成23年11月28日 第6回実行委員会
第2回研修の反省点及び次回研修の確認など
- ・平成24年1月23日 第7回実行委員会
第3回研修の反省点及びアンケートの集計、まとめなど

研修報告

- ・第1回～第3回 「看取りのケアプラン作成時における医療との連携」
- ・講師：(財)東京保健医療公社 豊島病院 緩和ケア内科(PCU) 医長
山田 陽介先生 東京医科歯科大学大学院非常勤講師他
- ・第1回：平成23年6月25日(土) 14:30～16:00
グリーンホール601会議室 参加人数：45名

・第2回：平成23年10月14日（金） 18：30～20：30

グリーンホール402会議室 参加人数：38名

・第3回：平成23年12月9日（金） 18：30～20：30

グリーンホール402会議室 参加人数：42名

- 内容：1、緩和ケアとは・・・
2、苦痛をとる医療とは・・・
3、プライマリーケアとは・・・
4、スペリチュアルペインとは・・・
5、日本ホスピス・緩和ケアの要件
6、チームアプローチで出来るケア・・・
7、患者にとっての最善とは何か？

アンケート集計結果

<設問> 講演会は、いかがでしたか？

- ① 良かった 114名 ② まあまあ良かった 7名 ③ 普通 なし
④ あまり良くなかった なし ⑤ 良くなかった なし 回答なし 4名

<設問> ご自分の現在のお仕事等に参考になりましたか？

- ① 大変参考になった 115名 ② まあまあ参考になった 2名
③ 普通 なし ④ あまり参考にならなかった なし ⑤ 回答なし 8名

<設問> ターミナルケアを知ることは重要だと思いますか？

- ① 重要だと思う 108名 ② ある程度は必要だと思う 9名
③ そんなに必要性は感じない なし ④ 全く必要性は感じない なし
⑤ 回答なし 8名

その他 ・緩和ケアの重要さ（痛みを除去する＝苦痛を和らげる方法をいろいろ聞いて、患者その家族の苦しみを取り除くチームの各メンバーの心掛けが重要であること）を痛感します。

・質問コーナーが大変良かったです。

・ケアマネジャーとの接点を医療側からみてどう考えているのかもっと説明してほしい

・医療との連携に関する検討や講演をしてほしい。

・少し内容的に高度だったと思われます。

研修を終えての感想

・板橋区ケアマネジャー研究協議会では、毎年数回の研修を開催しているが、今回の研修ではシリーズを通して参加人数が多かった。背景には、実際に看取りのケアプラン作成の事例が多くなってきている事もあるが、私たちケアマネジャーの理念の中に福祉という概念が強い事も関係しているように思った。介護保険という制度だけのものではなく、介護の福祉的見解に皆、興味があるのだと思う。そこには、今回学んだスペリチュアケアなどの概念が根付いている。日々迷いながらも、一人一人のケアに関われることや人と人との接点に喜びを見出してケアマネジャーを続けているのではないかと感じた。その中で、山田先生が「私たちがこの患者に死が訪れるまで、生きていることに意味を見いだせるようなケアを行う事がチームアプローチである。」と教えてくださったことに感銘を受けた。この事は、看取りだけに限らず、すべてのケアプラン作成時に活かされることと思う。

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による完了報告書とする。